

山に親しみ山に想う(26)

—小白山国立公園・太白山道立公園紀行—

<文・写真> 岡本

韓国在勤中、2002年8月17日から22日まで夏休暇をとって韓国小白山国立公園と太白山江原道立公園を巡った。本随想は旅先で書き、ソウルに帰京した日に留守宅にファックスしたものに若干添削したものである。

今日22日に5泊6日の地方旅行から、太白駅発無窮花号(ムグンホワホ)便でソウル清涼里駅に着いた。到着時の率直な印象は、「ソウルは大都会だ」というものである。考えてみれば、ソウル首都圏には国内総人口の半分が集中していることからすると当たり前のことだ。今回旅行した丹陽、寧越、太白の地方都市とソウルとの大きな格差に殊更驚いた。最近地方都市は観光開発をした結果、金回りが良くなりつつあるが、依然と格差は大きいので若者が豊かで可能性を感じさせるソウルに憧れるのも無理はない。最近、若者が流行歌「ソウル讃歌」を愛唱歌にしている理由も理解できる。

では、今回の地方(登山)旅行の日程概要は次の通り。

- 17日(土)=ソウル発丹陽へ、市内見学、小白山麓で民泊
- 18日(日)=小白山登頂、丹陽に戻り民泊
- 19日(月)=丹陽発、救仁寺、温達山城、温達洞窟見学、寧越に行きモーテル泊
- 20日(火)=寧越で莊陵見学、太白に行き民泊
- 21日(水)=太白山登頂、太白石炭博物館見学、太白でモーテル泊
- 22日(木)=太白発、ソウル帰京

旅行中のその日の出来事は就寝前に書くのが良いのだが、宿には机がなくて翌日早朝に宿近くの喫茶店で書くこともあった。メモを見ながら書いていると、店員があなたは旅行作家なのか、日本人なら韓国の印象を聞かせて欲しいと物見高い韓国人らしく邪魔をするので、落ち着いて書いておられず途中で切り上げたりした。文章に疎密があるのはその為だといっておこうか。

17日午前10時前にマンション前のバスに乗り10時半頃ソウル清涼里駅に着いて、11時発安東行き無窮花号(座席は指定で11000ウォン、立ち席は7800ウォン)に乗った。指定席が満席のため立ち席で我慢した。運行は正確で予定どおり午後2時丁度に丹陽駅に到着した。丹陽で降りた客は7人と少ない。駅からは、ソウル市中を流れ海に注ぐ漢江の支流、南漢江の滔々たる流れが見える。駅前に国道が通り、駐車場にはタクシーが6台程客待ちをし運転手仲間が屯している。地方都市で見られる悠悠閑閑とした雰囲気は流れている。駅に隣接した観光案内所で厚化粧の女性から観光地図をもらった際に、小白山登山に来たんだと伝えると、近郊バスでトリアン観光地に行き、そこの民泊に泊まると登山コースに近くて便利だと助言してくれた。彼女も登山を趣味にしている口振りであった。



時間の余裕があったので、丹陽中心街をぶらぶらと観察がてら歩いた。最初に韓国勤務した1970年代後半から80年代初にかけての地方都市の街中と比べると、豊かさにおいて正に雲泥の差と言うか、見違える程である。当時は地方に行っても日本家屋が残っていたものだが、全く見られない。もし今も残っていたなら、観光資源として活用されているやもしれない。

中心街にはPC房(インターネットカフェに類した店)、ピカチューゲームセンター、外国語学院、もちろんコンビニもあって、時代の流れを敏感に追い求めている。最も大衆的なピピンバップ(混ぜ御飯)は5000ウオン、喫茶店のコーヒーも1500ウオンでいずれもソウル並みの価格である。ソウルでは喫茶店の伝統的な名称であるタバ(茶房)の看板からカピイーシャップという看板に変わってしまったが、ここでは依然と懐かしいタバであった。懐かしさついでに1970年代のコーヒーは50ウオンであった。30倍である。1970年代のピピンバップの価格は思い出せないが、ピピンバップと同じように大衆的なスンドブ(純豆腐御飯)は180ウオンだったから、これは28倍程である。

丹陽発午後6時の近郊バスでタリアン観光地に向かった。到着した頃には長い夏の日も暮れなずみ始めていた。新装旅館の看板をみて電話してみたが、満室であった。自家用車で来る観光客が多いのだ。旅館からレベルを落として民泊を探すことにした。ある民泊前に座っているおじさんが下山者とみて「登山ですか」と声を掛けてきた。一室空いていると案内してくれた。部屋はいやはや3畳程の狭さで小机一つなし、隅にあるテレビは故障の代物、シャワーは共同使用、幸いにも部屋には鍵がついているので泊まることにした。夕食をおばさんに頼むと、例によって嫌な顔をした。「近くに食堂はあるよね」と嫌なら外で食べるよ、と言う口調で言うと、おばさんは、「1人の夕食はどこでも嫌がるからね」と言いながらも、テンジャンチゲ(具の多い鍋料理)ならできると言う。割高なチゲ(5000ウオン)とビール(2500ウオン)を注文した。部屋代も25000ウオンで丹陽の風呂付きと同じである。観光地価格なのだろう。窓には虫除けの金網が張ってあった。空気入れ替えのために金網戸にして、その間にシャワーをとった。戻ってみると、金網戸の隙間から大量の虫が入り込み床や壁にへばり付いていた。幸い刺す虫ではなかったが、蚊程の大きさの虫は、蚊柱のように群れ飛ぶのだ。窓から払い出そうとしたが出しきれぬわけがなく、灯りを消して早々に寝た。

翌18日は午前5時に目覚めた。昨夜売店で買ったチョコパイと牛乳で朝食を済ませた後、民泊玄関横の円卓で前日の日誌を書いた。主人のおじさんに小白山登山のルートについて尋ねると、「ああ、大したことはない、ただの一本道だから5時間かな、まあ一日仕事だ、雨具は」と言う。小雨が降り出しており、重そうな雲が山壁を埋めている。夏だし少々の雨なら濡れても着替えれば良いことにして雨具は持ってこなかった。6時半に民泊を出た。入山切符売場では中年夫婦と中年男子が一足違いで先に出発した。入山料は小白山国立公園管理事務所北部支部長受領で1300ウオンであった。公園内には文化財的な寺がないので文化財観覧料は不要である。登山道に沿うチョンドン溪谷は水

量が豊かで勢いのある瀬音を立てて流れ降る。少し濁りがあり、清流とは言えないのは、先日の豪雨のためである。登るにつれ豪雨の痕跡が現れる。登山道の縁が所どころ崩れており、鉄砲水が登山道に溝を刻み運ばれてきた小岩や礫岩が散乱している。生々しい爪跡がある割には、危ない箇所はなく、注意版もない。入山切符売場から 2.7km 地点にあるキャンプ場までは 3m 幅の道であるが、その先から深い樹林の中の 50cm 幅の道になった。朝の雨は止み日が照り出したが、差し込むことはなく、登山道はジトジトとして足元は重たい。切符売場で出逢った 3 人以外誰とも遭遇してない。静かな単独行である。

9 時 45 分に温達泉という湧水のある休憩所に着いた。ベンチが一つあり、道標「標高 1165m、小白山山頂(毘盧峰 1439m)」がある。3 時間強で 4.8km 進んだ。時速約 1.6km である。幾度も腰を下ろして休み、腰を上げるたびに 30 分は歩き続けると決めるのだが、……。標高 1200m 程になると、細くなってきていた溪流は、伏流になって姿を消した。耳を澄ますと、足元の石の下からチョロチョロと微かに聞こえる。樹木は灌木となり樹林は疎らになりだした。突如樹林が消えて、豁然とお花畑に出た。薄暗さから陽光燦々の世界へと。黄、白、薄紅、薄紫の小ぶりの花がなだらかな起伏を覆って咲いている。初めて体験するお花畑である。花の名前は全く知らない。薄紫色の舌を出したよう



な花の群生が一際目立った。木道がお花畑を通過して山頂方向に続いている。木道を歩く登山者は他には居なくて、千紫万紅の極楽を独り占めである。円頂丘の陰から 30 代の夫婦(切符売場の 3 人を除き初の登山者)が降りてきて、すれ違いざまに「ありがとうございます」と挨拶した。狭い木道を譲ってくれたと思ったに違いない。自分はお花畑に気を取られ茫然と佇んでいただけ

けである。標高 1300m 辺りに来ると、小白山塊の稜線が右肩下がり(南)に見えだし、蓮華峰が確認できた。すると、間も無く、急な左肩上がりが見え出し円頂丘の端に毘盧峰が顔を出した。毘盧峰頂上が明るい。早く頂上に達したいという逸る心を抑えて登る。

「なぜ山に登るのか、そこに山があるから」と言う意味が少し理解できたような気がした。頂上付近になると、急に登山者が 20 人程に増えた。子供連れの家族、夫婦、若い男女のグループであるが、慶尚北道側の交通便の良いスチョルリや三佳里の登山口から登ってきたのだ。小白山毘盧峰に 11 時 30 分に着いた。頂上は岩がゴロゴロと敷かれたような 20m 四方の平地である。地図で見ると、小白山の最高峰毘盧峰(標高 1439m)は忠



清北道と慶尚北道の道境に記されているが、1m 程の石柱には「忠清北道、毘盧峰(ピロボン)」と忠清北道となっている。登山者が自然石を積み上げた三角錐のケルンがあり、他にベンチが 4 基あるだけだ。頂上からは、全方位展望できる。樹海の中に何処かの集落の家並みが遠く小さく見え、爽やかな涼風が頂上に満ちている。お花畑の起伏に落ちた真夏の雲の影が風紋のよ

うに流れていく。



30分程毘盧峰の頂上を居て、11時半頃に於衣谷登山口へのルートで下山することにした。於衣谷集落まで1m幅の石の少ない登山道を5.1km降った(登りは石がちの山道を6.8km)。降りでも誰とも会わなかった。於衣谷バス停(終点)にある売店のおばさんに尋ねると、次の丹陽行きバスは4時10分頃で「1日に7便しかない、遊び

に来る人は車だし、地元の人でも車を持っているから」と言う。確かに何軒もある民泊の前には車が泊まっており、観光客からの現金収入で潤っているようだ。売店で缶コーヒー、ジュース、ポカリ、アイスクリームを買って水分補給した。満身に水分が充填するのを実感した。今朝出発時のポカリ3本を含む1500ccの水分は下山までに飲みきっていた。

丹陽行きのバスはクックマン川沿いの崖の上をくねりながら走る。車窓から眺める情景は、英国のイザベラ・バード女史が末期の李氏朝鮮を4度訪れて上梓した旅行記「朝鮮紀行」の風景描写もむべなるかなと思わせるものである。やがて本流の南漢江に出ると、悠然たる流れが大きく蛇行している景色を眺めるようになる。山行で興奮した心が静まる。30分程で丹陽に着いた(1300ウオン)。バスターミナル近くの「小白山荘」旅館(宿泊料20000ウオン)に投宿した。内風呂に入り、外で好きなソルロン湯(肉汁飯)を食べ、小さな机でこの日の出来事を書いて、休む。背中がこわばっており、温突部屋の硬い床では寝苦しかった。